

コラム「社会からみる肥満症」

1. Adiposity reboundの正体（要旨）

Adiposity rebound とは、Rolland-Cacheraらによって初めて定義された言葉で、小児においてBMI がいったん最小値を示した後、再び上昇する“はね返り”を意味する(Rolland-Cachera M-F et al. Am J Clin Nutr 1984, 39 : 129-135)。6歳前後に起こる。このreboundが若年で現れるほど、成人した際、肥満になる危険率が増すという。

すでに複数の論文でadiposity reboundが成人期のBMI上昇となんらかの形で相関していることが述べられているが、成人期のBMIのreboundが体脂肪量の増加に関係するのに対し、幼児期に起こるadiposity reboundが何に起因しているのかは、まだ明らかでない。

若い男女を対象にBMIと皮下脂肪厚測定で肥満の程

度を調べたstudyでは、adiposity reboundが幼児期の早い時期にみられた若者では、それが遅い時期にみられた若者よりも肥満率が高い結果が出ている。このstudyの対象数は少ないが(n=14~21)、そのうち数名は肥満でBMIは30以上を示す。

BMIが大きい子どもでは、adiposity reboundと同時期に合併症が起きることがある。幼児時のBMIは成人期のBMIより、余病併発の危険度を知る指標として有効な基準になる。なぜなら、 $BMI = \text{体重(kg)} \div \text{身長(m)}^2$ であるから、成長過程における体重の増加や、身長が発育が鈍ることによってBMIは上昇するからである。そして、あまり知られていない事実であるが、早い時期に

adiposity reboundがみられた子どもは、遅い時期にみられた子どもに比べ、体重が重く、身長の発育が緩やかである。

アメリカでは子どもたちの生活習慣(テレビを見るなど)がBMIのreboundに関連しているといわれている。蛋白質、脂肪、炭水化物などの摂取開始時期や両親の食習慣が、BMIの増加と関連すると指摘するstudyもある。

2. Adiposity reboundと社会環境（コメント）

小児期は心身ともに基礎づくりの時期である。すでに多く指摘されているように、小児肥満はその行動パターンに大きく関連する。Adiposity reboundについて医学的に未解明の部分もあるが、関連する要因の一つと考え

られる「環境」にも注目したい。自発的に動く機会が減り、受け身になりつつある環境が肥満の一因にな

る。アメリカでは、子どもの屋内での生活時間の長期化、学校への自家用車による送迎なども肥満の要因と考えられているが、その背景に子どもを危険な外部環境から守りたいという親の意志もあるという。社会の中で自分の身を守ろうとする行動が、健康を害することがある。

置かれた環境は良かれ悪かれ、個人の生活習慣を決めていく。小児でも、である。わが国でも犯罪の低年齢化、疎遠な人間関係などが目立つ。人の心理がさまざまな形で表面に現れ環境の一部となるとき、社会の抱える問題が、健康に及ぼす影響は如何ほどのものであろうか。

(編集部)

“ Adiposity rebound ” の正体

[Lancet, Vol.356, 2000より]